

●二人で味わう古典和歌(41)

行きなやむ牛のあゆみに立つ塵ちりの風さへ暑き夏の小車ちくるま

藤原定家

『玉葉和歌集』「夏」の一首。

「暑さで行き悩んでいる牛ののろのろした歩み。それに
つれて立つ砂塵の暑苦しさ。吹く風さえも熱気を含んだ、
夏の街なかを行く牛車であるよ」。

牛車の歩みに砂埃が舞い立ち熱風が吹く。都大路もまた、
夏はこんな光景だったのかと親近感が湧く。これほどリア
ルで暑苦しい和歌はあまり見たことがない。素材も歌風も、
王朝的美意識から大きくはみ出す異色の作であり、案の定、
伝統重視派にはすこぶる評判の悪い歌。こんなのは玉石の
うちの石みたいな歌だから、とるべきではないと。しかし、
京極為兼はこの新風を評価して、『玉葉和歌集』に撰入し
た。優れた撰者がいてこそ、歌は残る。

定家の自撰家集である『拾遺愚草』によれば、建久七年
(一一九六)に、内大臣・藤原良経邸で催された「韻歌百



廿八首和歌」の一首。本来は漢詩の脚韻に用いる「韻字」
を和歌に応用して、すべて結句に詠み込んだ百二十八首で
ある。おそらく当日の即詠にちがいないから、凄い。

右の歌の韻字は「車」。

同じ「韻歌百廿八首和歌」には次の歌もある。

立ちのぼり南の果てに雲はあれど照る日隈まなきころの
虚おほぞら

「遠い南の地平線に立ちのぼっている雲はあるが、烈日
が隈なく照りつける夏の天空であるよ」。

韻字は「虚」(訓読みでオオゾラ)。

「雲はあれど」の逆接がもたらす不思議な不安感と、

「照る日隈なきころの虚」の底深い静寂により、まるで白
昼夢を見ているような、シユールな感覚にくらくらする。

韻字「車」と韻字「虚」。牛車が砂埃を立てる暑苦しい
街上風景と、しんかんとした炎昼の天地。ともに炎暑の真
昼を詠んだ歌である。この二首を見るだけでも、歌人の底
知れぬ力を思わずにはいられない。定家三十五歳の挑戦。

(小島ゆかり)